第三百四十九回　青葉会

平成二十七年四月二十三日（木）　午后五時半～八時半　丸紅来客食堂（談話室）

〈選者〉☆川合万里子　先生（御自宅でリハビリ中）

〈出席者〉伊賀山そらお　今井紀久男　大林猛　柿崎忠彦　久米五郎太　小西弘子　豊田ゆたか
中山芳博　星田啓子　山崎亜也　山内天牛
後藤保明　小早健介　朱牟田恵洲　土谷堂哉　中野一灯　福島正明　古田昇　宮内規雄
渡邊盛雄

〈投句〉赤田堅　安部眞希子　小川恭延　川口孤舟　楠田彦十　在間千恵　庄司龍平　高橋敏郎
橋口隆　早川允章　福島正明　村田くに子　山崎青史　山本三恵

〈紙上選句〉知人の真打昇進を祝う（入船亭扇蔵）

《互選句》

八点
☆酒を酌むしぐさも真打春うらら　ゆたか（万・堅・紀・恭・五・敏・隆・允）

六点
☆磯の香や路地の屋台の干細魚（さより）　仝（万・堅・孤・彦・允・啓）
☆ゆるやかに曲る大利根花菜風　芳博（万・猛・忠・孤・五・允）

五点
☆転職の子は旅立ちぬ穀雨の夜　仝（万・そ・恭・龍・く）
遠富士に投網する人春の海　仝（そ・ゆ・亜・天・三）
（孤…投網は夏の季語「川狩り」の傍題にあり）（季重なりになる）
花筏掬ひとりつつオール漕ぐ　啓子（孤・ゆ・隆・く・亜）
亡き妻によく似た人や朧月　規雄（五・弘・隆・天・三）
（☆→亡き妻にそっくりな人月おぼろ）

四点
☆佛前へ洋酒の小瓶春の宵　盛雄（万・堅・彦・隆・く）
生え競ふ土筆の群や小糠雨　そらお（猛・龍・芳・天）
自転車を野に漕ぎ出せば風光る　仝（眞・孤・ゆ・青）
（☆…因果語法はなるべく用いない→中七「野へ漕ぎ出すや」）
車座に凹む青芝始業ベル　一灯（眞・紀・弘・青）
（☆→青芝に車座の跡始業ベル）
春の海沖の小島は空に溶け　ゆたか（堅・そ・孤・千）
（☆→上五「春波や」）
朧夜や懐刀確かめる　正明（彦・隆・亜・三）
吉野山潮満つるごと花ひらく　昇（恭・五・ゆ・く）
（☆→満潮のごと花開く吉野山）
大原に名残の花を訪ねけり（宝泉院）　亜也（敏・允・啓・三）
緑立つ庫裡にて呪せり般若波羅　仝（恭・五・芳・青）
（☆→「心経を庫裡にて誦せり若緑」般若心経）
芽吹く樹々自ずと動く万歩計　盛雄（孤・千・正・く）
（☆→樹々芽吹き自づと動く万歩計）

三点
☆黄緑が濃（こまや）かさ増す穀雨けふ　猛（万・芳・啓）
（☆→艶を増す木々の黄緑今日穀雨）
桜咲くふと若き日にゐるやうな　忠彦（敏・亜・天）
（☆→上五「花の昼」）
春の島風と競ひて謡ひけり（厳島奉納）　五郎太（堅・正・啓）
（☆→春風と競ひ謡を奉納す）
幹を背にせるが上座や花見酒　恵洲（正・亜・青）
（☆→花見衆や上座は桜の幹を背に）
☆亡き友の夫人と墓参花の雨　堂哉（万・眞・紀）
☆黄昏れて遊山の果ての桜風呂　々（万・彦・弘）
梁太き龍馬隠れ家春の雷（鞆の浦にて）　ゆたか（眞・允・正）
（正→中七「龍馬が隠れ家」）
見当らぬ石蹴りの円子供の日　正明（紀・天・三）
☆リハビリも花見と母を誤魔化して　啓子（万・紀・猛）

☆ 石楠花にはや花芽萌ゆ深山の湯　啓子（万・千・敏）
春霞富士は墨絵の箱根路（みち）　々（そ・忠・青）
（☆→箱根路（ぢ）の富士は墨絵や春霞）

☆ 春逝くや傾き優し柿葺（こけらぶき）　亜也（万・忠・青）
☆ 御神酒まき若芽の柿の大樹切る　天牛（万・ゆ・亜）
春寒し遺品の整理捗らず　そらお（龍・三）
（☆…三段切れを避けて→「捗らぬ遺品の整理春寒し」）
花菜漬昼の酒盛り限（き）りもなや　紀久男（猛・龍）
（☆→限りもなき昼の酒盛り花菜漬）
鎮魂の陛下の春旅ペリリュー島　仝（猛・隆）
（☆→鎮魂の陛下へペリリュー島の春）
春の山芽吹きがふわり盛り上げる　猛（堅・恭）
（☆→春山の芽吹きふはりと盛り上がり）
暮れ泥（なず）む山に桜の薄明り　々（そ・千）
知らぬ間に秘密を隠す春霞　忠彦（五・芳）
霾（つちふる）や「蒙古来るぞ」の子守歌　々（眞・天）
ペリリューの海見る陛下花惜しむ　仝（紀・弘）
（☆→ペリリューに陛下の祈り名残の花）
一門に尽し小山三（こさんざ）の花吹雪　々（紀・彦）
負け蛙鳥獣戯画より逃げ出せり　健介（千・敏）
（青・孤…季語としては？）
異国語の飛び交ふ御室桜かな　々（恭・千）
☆ 桜散る寺の奥なる礼所（ふだしょ）かな（仁和寺）　五郎太（万・眞）
春宵や藍に溶けゆく島の影　々（そ・猛）
（☆→春宵の島影溶ける藍の海）
忠犬の頬を撫で行く春落葉（東大構内ハチ公像）　保明（忠・弘）
春愁を思はせゴリラの動かぬ背　恵洲（芳・天）
（☆→春愁かゴリラの背（せな）の動き無く）
生き生きと生きて香（かぐ）はし山つつじ　芳博（龍・ゆ）
浅草の路地の地蔵や踊り子草　々（忠・正）
（☆→浅草や路地の地蔵へ踊り子草）
☆ 田芹摘む我が手気付けば父に似て　啓子（万・龍）
（☆→田芹摘む我が手の父似に気付きけり）
あの世にも桜はあるや西行忌　規雄（敏・啓）
男手で米磨ぐ水の温みけり　天牛（忠・正）
☆ 自堕落に本投げ遣りて朝寝かな　そらお（万）
☆ 神楽坂お花見がてら碁を打ちに　紀久男（万）
花散るや頬をくすぐり背にすがる　猛（芳）
☆ 訝（いぶか）りつ晴れ確かむる花の後　弘子（万）
すみれ濃く礎石へ噴きし六地蔵　々（啓）
浮雲の白馬越え来る花辛夷　一灯（允）
絢爛と楊貴妃桜散りにけり　昇（く）
☆ 春暑し伏見の社の聖と俗　亜也（万）
糠まみれ鍋の筍茹で上がる　天牛（弘）
屋上に売らるる藻草白目高　？（彦）

二点

一点

●次回青葉会
五月二十八日（木）　午后五時半から八時半　（丸紅　談話室）
▲当季雑詠五句　投句二句
六月二十五日（木）　午后五時半から八時半　（丸紅　談話室）　以上文責　紀久男

平成二十七年四月句会報

一　今回は久しぶりの芳博さん含む１１名出席。投句９名。万里子先生からの選句・添削を回覧しつつ、弘子さん寄贈の白海老煎餅（富山）、啓子さんからの「天狗舞」、忠彦さんの「高清水」、小生の「奈良萬」（喜多方）と「〆張鶴・純」いづれも純米吟醸、そして芳博さんの「百年の孤独」（宮崎の麦焼酎）と珍味美禄を賞味し乍ら開始。いつもの猛さんが進行役で、御覧のようにゆたかさん、芳博さんが高得点でした。

二　関係者近詠

頂花から早や満開の乙女椿　万里子
白梅の細枝を撓め番鳩　〃
啓蟄や工事を急ぐ通学路　〃
校庭を球と力走日脚伸ぶ　〃
亡き父の文語聖書を繰る日永　〃
味継がな蕗の薹味噌母の忌に　〃
梅散るや中東からの安着報　〃
ゴム輪跡手首に深く春炬燵　眞希子
一人子のをのこ後込む雛売場　〃
受難節十色の人の祈り合ふ　〃
知り合ひのすがた外を過ぐ冬柳　弘子
紅椿一輪重しストレッチ　〃
椿落つ水の重さの音をして　〃
白鳥へ一枚二枚田を渡る　〃
水鳥の風に押されて遠筑波　〃
春時雨止まず蟄居のまに暮る　恭延
盆梅を褒めてすぐには立ち去れず　青史
整はぬ紅梅なれどこの人出　〃
青饅を舌に乗すればそこに母　〃
素魚をしばらく舌で遊ばせて　〃
春立つ日この先の春数へをり　〃

―「萬緑」―　五月号

橋脚に崩れ分かるる花筏　弘子
栄螺焼く頬をゆるめて孫自慢　〃
ふつつりと渡船欠航花の雨　〃
花は葉に音羽屋手植ゑの枝垂かな　紀久男
見よかしに番鳶の春の舞　〃
こらへかね昼の一酌しらす丼　〃
雨上がりみるみる客殖ゆ春の島　〃

―「萬緑」　江の島吟行

去年（こぞ）弥生華風の会も幕となり　網谷昭寛
本流となり轟轟の雪解川　孤舟
碧天を細め太めて鶴帰る　〃
白粥に塩ひとつまみ涅槃西風　〃
鳥帰り空に綻びなかりけり　〃
田返しの土の潤みや風生るる　〃
真青なる宇宙へ凧の糸を曳く　〃
パスポート持たず棹なす帰雁かな　〃
麗かや裸婦像多き美術館　〃
夕刊のあとの蛙の目借時　〃
白き帆のボトルシップや卯波立つ　〃

―「俳句四季」五月号

（新作１５句より当会既出除く１０句）

うらうらと眠気を誘ふ花の昼　允章
爛漫の花の上なる五重塔　〃
春昼や大亀子亀甲羅干し　〃
記帳の我が名歪みて淡き春愁い　恵洲
花の雲江戸城に天守なく　〃
駆けて来し子が掌開けばさくら貝　〃

―　大鉄会　4月

母の忌をひとり読経や春灯（ともし）　盛雄
北へ消ゆトワイライトや鳥雲に　〃
深海の昭和の遺骨や手向け花　健介
骨髄の病すべなし花の雨　〃
陛下待つ春のパラオや骨数多　紀久男
身寄りなき友の骨壺雪柳　〃

―　きさらぎ句会　4月

武蔵野の空へ欅の芽吹きかな　允章
にぎやかに追ひつ追はれつ恋雀　〃
夜桜や月蝕さぐる望遠鏡　堂哉
行く春や「地獄八景」もう聞けず　〃
抽斗の何かを噛みて日短　丹野敦雄

―「俳句」四月号　池口善子選

三　今年の二月堀口星眠に続いて同じ９１歳で亡くなられた和田悟朗（現代俳句協会顧問・奈良女子大名誉教授）の追悼文が「俳句」五月号に掲載されております。盛雄さんは和田悟朗の選（毎日新聞兵庫文芸欄）に１５４句も入っているそうです。追悼文中１６句の内、小生好み８句抄出しました。

親鸞と川を距てて踊るかな　藤の花少年疾走してけぶる
永劫の入口にあり山さくら　即興に生まれて以来三輪山よ
夏至ゆうべ地軸の軋む音すこし　人間であること久し月見草
生涯は水の研究なりしかな　眼球も地球も濡れて花の暮

平成二十七年五月十日　紀久男記